

『十万頌般若』『二万五千頌般若』『一万八千頌般若』における「正法」説示の諸相 ——「正法隠没」に関する記述を手がかりとして——

庄 司 史 生

1. はじめに

従来の研究において、諸般若經典のうち、すでに『金剛般若』(*Vajracchedikāprajñāpāramitā*)と『八千頌般若』における「正法の隠没」(あるいは法滅)に関する説示が取り上げられ、詳細な研究がなされている⁽¹⁾。このような研究状況をふまえ、本稿ではこれまでこの問題(般若經における正法とその隠没)を扱う際に用いられることがなかった、いわゆる“Larger *Prajñāpāramitā*”として一括される『十万頌般若』(*Śatasāhasrikāprajñāpāramitā*)、『二万五千頌般若』(*Pañcaviṃśatisāhasrikāprajñāpāramitā*)、『一万八千頌般若』(*Aṣṭādaśasāhasrikāprajñāpāramitā*)について、梵本(現存するもののみ)、および蔵訳を補助的に取り上げて検証を行う。それにより、サンスクリット系の言語に基づく南アジア、またチベット語に基づく内陸アジアの仏教文化圏内における、般若經の正法説示の諸相を明らかにすることが本稿の目的である。

本稿では紙幅の都合上、研究の対象を上記文献資料に限定する。以上の他に、大別して基礎的般若經に位置付けられる般若經として、蔵訳のみが現存する『一万頌般若』(*Daśasāhasrikāprajñāpāramitā*)や、“Smaller *Prajñāpāramitā*”に位置付けられる『八千頌般若』(*Aṣṭasāharikāprajñāpāramitā*)があり、後者については先述の通り研究もなされている。本稿で扱う『十万頌般若』等とそれらを対比しての考察は別稿にて行うことにしたい。本稿で扱う文献資料は、表1中の下線部にあたるものである。⁽²⁾

表1 蔵訳に基づく Larger *Prajñāpāramitā* と Smaller *Prajñāpāramitā* 一覧

Larger P.	『十万頌』、旧・新『二万五千頌』*、『一万八千頌』、『一万頌』
Smaller P.	旧・新『八千頌』**

* 『二万五千頌般若』には『現觀莊嚴論』による改変以前・以後の旧・新テキストが現存している。

** 『八千頌般若』も同様に同論による改変以前・以後の旧・新テキストが現存している。

ところで、表1に注記したように、現存する諸般若経の中にはマイトレーヤに帰される『現観莊嚴という般若波羅蜜論』（*Abhisamayālaṅkāra-nāma-prajñāpāramitā-upadeśa-sāstra*）からの影響により経文に改変がなされていたものがあることが知られている⁽³⁾。

表2 『現観莊嚴論』からの影響の有無に基づく諸般若経の分類

『現観』からの影響なし	『十万頌』（梵・藏）、旧『二万五千頌』（藏）、『一万八千頌』（藏）、 『一万頌』（藏）、旧『八千頌』（藏）
『現観』からの影響あり	新『二万五千頌』（梵・藏）、新『八千頌』（梵・藏）

以上のように、ここで扱う般若經典は「論」（この場合は dharma に対する abhidharma ではなく、sūtra に対する upadeśa-sāstra を指す）に基づき、「経」（sūtra）が改変されてきた痕跡を明らかに残す典籍⁽⁴⁾である。つまり般若經典は、「経」を前提としてそれに基づき「論」が作成され、そしてその「論」の理解が「経」を改変させていくことを裏付ける根拠資料が現存しているという点⁽⁵⁾において、仏教史、特に經典の形成史を解明する上で貴重な文献資料群であると理解することもできる⁽⁶⁾。このような理解に基づく限り、『八千頌般若』から『十万頌般若』の中の特定の般若経を扱う際にも、それを常にパラレルに読み解くよう、留意すべきであるとも考えられる。

2. 研究の範囲

本研究で扱う範囲とは、『八千頌般若』を例とするならば、その第10章の、いわゆる「般若経南方出現説」⁽⁷⁾が示される箇所にあたる。梶山雄一博士による梵本からの和訳を示すと次の通りである。

さらに、シャーリプトラよ、六種の完成と相応したこれらの經典は、如来の死後、正しい教えが消滅するときに、（説法者たちが）教えと戒律を新鮮なクリーム（醍醐）のように受け止めるならば、南の地方に流布するであろう。南の地方からさらに東の地方に流布するであろう。東の地方からさらに北の地方へ流布するであろう（梶山 [1974: 275]⁽⁸⁾）。

詳細は本稿にて示すが、上記の梵文『八千頌般若』の経文と、同箇所に対応する『十万頌般若』等の般若経の経文とでは文章に相違がみられることがわかる。そのような相違は、『八千頌般若』の経文に対して、經典編纂者たちが何かしらの文言を単に追記して『十万頌般若』等の般若経を作り上げていったわけではなかったとの推定を可能にするものである⁽⁹⁾。經典変容の過程は、決して直線的なものではなかったと考えられる。

表3 本研究で扱う範囲

大分類	小分類	梵文等	蔵訳	漢訳
Larger P.	十万頌	ネパール伝世写本：31 / 章題欠	kanjur: 31 / 章題欠	T220 (1): 39 / 難聞功德
	〔新〕二万五千頌	ネパール伝世写本：章数欠 / 章題欠	tanjur: 章数欠 / 章題欠	
	〔旧〕二万五千頌	現存せず	kanjur: 30 / 章題欠	T220 (2): 43 / 東北方 T221: 46 / 真知識 T222: 該当箇所現存せず T223: 45 / 聞持
	一万八千頌	現存せず	kanjur: 39 / <u>byang phyogs kyi rgyud</u>	T220 (3): 13 / 陀羅尼
	明記なし	ギルギット出土写本：該当箇所は現存するが章数・章題不明 敦煌出土写本・スリランカ出土本・中央アジア出土写本：該当箇所現存せず		
	一万頌	現存せず	該当経文なし	現存せず
Smaller P.	〔新〕八千頌	ネパール伝世写本：10 / <u>dhāraṇa-guṇaparikīrtana</u>	kanjur (3), <u>'phreng ba can:10 / 'dzin pa'i yon tan yongs su brjod pa</u>	T228: 10 / 讚持 (T229: 10 / 称讚功德)
	〔旧〕八千頌	現存せず	kanjur (2), <u>sde can:10 / 'dzin pa'i phan yon</u> kanjur (1), <u>bzo sbyangs:10 / 'dzin pa'i phan yon</u>	T220 (4): 10 / 総持
	明記せず	アフガニスタンのバミヤーン溪谷出土（仏教梵語）写本：該当箇所現存せず		T227: 10 / 不可思議 T220 (5): 10 / 不思議
		パキスタン北部のバジョールまたはモーマンド近郊出土（ガンダーラ語）写本：該当箇所現存せず		T226: 該当箇所現存せず T225: 8 / 悉持 T224: 8 / 持

※本表は、あくまでも本研究、特に本稿で扱う範囲を示すために便宜的に作成したものである。そのため、表中の梵・蔵と対応する漢訳の分類については、現状における想定を含むものである。Smaller *Prajñāpāramitā* に位置付けられる梵・蔵・漢のテキストの対応関係については庄司 [2016b: 68] を参照。

※表中に、各写本や版本と該当する章数／章題を示す。漢訳は大正蔵（T）番号のみを示す。

本研究で扱う般若經典のうち、本稿にて用いる具体的な範囲を一覧で示すと表3の通りとなる⁽¹⁰⁾。特に本稿で扱う範囲は、表中にて強調して示した箇所である。また本稿では、諸漢訳の中から、時代は下るものの翻訳者が一貫している玄奘（602-664）訳『大般若波羅蜜多經』を参照し、経文読解の手がかりとする⁽¹¹⁾。もしも般若經における正法の、本来的な説示内容（とその後の展開）を明らかにすることを第一の目的とするならば、現存する梵本や藏訳よりもはるかに古形を保持する漢訳をすべて参照すべきであるが、ここではそこまで扱わないこととする。

表3に示した諸本のうち、梵文や藏訳にはそもそも章題がないものもある。当該箇所の具体的な所在については、後掲のテキストとともに示す。また、三種の藏訳『八千頌般若』（*bzo sbyangs, sde can, 'phreng ba can*）⁽¹²⁾など、上記太枠外の文献資料については、先述の通り別稿にて取り扱う。

3. 『十万頌般若』における正法

『十万頌般若』には、ネパール系梵文写本の外、藏訳、また対応する漢訳テキストが現存している⁽¹³⁾。以下にそれぞれの記述を提示する。なお、現状において梵文写本に基づく校訂テキストが刊行途中であり、本稿で扱う箇所は校訂テキストが未刊行である。ここでは梵文写本からの和訳を本文に、翻刻テキストは後掲の注に示す。

3.1 ネパール系梵文写本の記述

世尊は言った。「そのとおりでである。シャーラドゥヴァティープトラよ、そのとおりでである。……さらにシャーラドゥヴァティープトラよ、この般若波羅蜜は、如来の滅により南方に流布するであろう（*tathāgatasatyayena dakṣiṇāpathe pracariṣyati*）。……

シャーラドゥヴァティープトラよ、この甚深なる般若波羅蜜は南方からヴァルタニに流布するであろう（*dakṣiṇāpathād varttanyāṃ pracariṣyati*）。……

そしてまたシャーラドゥヴァティープトラよ、この甚深なる般若波羅蜜は、ヴァルタニから北方に流布するであろう（*varttanyā uttarāpathe pracariṣyati*）。……

そこでシャーラドゥヴァティープトラよ、南方においても北方においても（*dakṣiṇāpathe uttarāpathe ca*）、この甚深なる般若波羅蜜は、最後の時、最後の時期、最後の五百年に（*paścime kāle paścime samaye paścimāyāṃ pañcaśatyāṃ*）、〔仏の仕事（＝藏訳より補足）〕為すであろう。それは何故か。何となればシャーラドゥヴァティープトラよ、如来の意図（*tathāgatasyaṇumati*）は般若波羅蜜であり、般若波羅蜜は如来の意図である。シャーラドゥヴァティープトラよ、法と律が醍醐となるときに正法が隠没することはない（*na hi …… maṇḍaprāpte dharmavinaye saddharmāntarddhānaṃ bhavati*）。またその法は何であるかと言えば、すなわ

ち、この般若波羅蜜である。……」

〔シャーラドゥヴァティープトラは〕言った。「また世尊よ、最後の時、最後の時期に (paścime kāle paścime samaye)、この甚深なる般若波羅蜜は北方に広まるであろう (vaistārakī …… uttarasyāṃ diśi bhaviṣyanti)』

世尊は言った。「そのとおりである、シャーラドゥヴァティープトラよ、そのとおりである。シャーラドゥヴァティープトラよ、この甚深なる般若波羅蜜は、最後の時、最後の時期に (paścime kāle paścime samaye)、北方に広まるであろう (vaistārakī bhaviṣyaty uttarasyāṃ diśi)。そこでシャーラドゥヴァティープトラよ、最後の時、最後の時期に (paścime kāle paścime samaye)、善男子と善女人はこの般若波羅蜜を聞くであろう、聞いてから……」

〔シャーラドゥヴァティープトラは〕言った。「世尊よ、最後の時、最後の時期に (paścime kāle paścime samaye)、北方において (uttare digbhāge)、菩薩乘に属する善男子と善女人は、この甚深なる般若波羅蜜を聞くであろう、聞いてから……〔そのような彼らは〕どれほどいるのであろうか」

世尊は言った。「またシャーラドゥヴァティープトラよ、最後の時、最後の時期に (paścime kāle paścime samaye)、北方に多くの菩薩摩訶薩があるであろう (uttare digbhāge bahavo bodhisatvā mahāsatvā bhaviṣyanti)⁽¹⁴⁾』

3.2 蔵訳カンギュル所収本の記述

世尊はおっしゃった。「シャーラドゥヴァティープトラよ、そのとおりである。そのとおりである。……

シャーラドゥヴァティープトラよ、この般若波羅蜜は、如来が滅してから (de bzhin gshegs pa 'das nas) 南方に流布するであろう (lho phyogs kyi rgyud na spyod par 'gyur te)。……

シャーラドゥヴァティープトラよ、そのようにこの甚深なる般若波羅蜜は、南方に流布してからヴァルタニの地に流布するであろう (lho phyogs kyi rgyud nas yul bar ta ni na spyod par 'gyur te)。……

シャーラドゥヴァティープトラよ、そのようにこの甚深なる般若波羅蜜は、ヴァルタニの地から北方に流布するであろう (yul bar ta ni nas byang phyogs kyi rgyud na spyod par 'gyur te)。……

シャーラドゥヴァティープトラよ、またこの甚深なる般若波羅蜜が南方に流布して北方に流布するとき (lho phyogs kyi rgyud dang / byang phyogs kyi rgyud na)、最後の時、最後の時期、最後の五百年に (phyi ma'i dus phyi ma'i tshe lnga brgya tha ma la)、私の仕事を為すであろう。それは何故か。シャーラドゥヴァティープトラよ、それは、この如来の意図というも

の、それは般若波羅蜜だからである。般若波羅蜜というもの、それは如来の意図である。シャーラドゥヴァティープトラよ、法と律が醍醐となるときに正法が隠没することはないのであり (chos dang 'dul ba dar la bab pa'i tshe / dam pa'i chos nub par mi 'gyur te)、またその法とは何かといえば、すなわち、この般若波羅蜜のことである。……

〔シャーラドゥヴァティープトラは〕言った。「世尊よ、この甚深なる般若波羅蜜は、最後の時、最後の時期に (slad ma'i dus slad ma'i tshe na)、北方に広まるでしょう (byang phyogs su rgyas par 'gyur ro)」

世尊はおっしゃった。「シャーラドゥヴァティープトラよ、そのとおりである。そのとおりであり、シャーラドゥヴァティープトラよ、この甚深なる般若波羅蜜は、最後の時、最後の時期に (phyi ma'i dus phyi ma'i tshe na)、北方に広まるであろう (byang phyogs su rgyas par 'gyur te)。そこでシャーラドゥヴァティープトラよ、最後の時、最後の時期に (phyi ma'i dus phyi ma'i tshe na)、善男子と善女人らは、この甚深なる般若波羅蜜を聞くでしょう。聞いてから……」

〔シャーラドゥヴァティープトラは〕言った。「世尊よ、最後の時、最後の時期に (slad ma'i dus slad ma'i tshe na)、北方において (byang gi phyogs cha der)、菩薩乘に属する善男子と善女人は、この甚深なる般若波羅蜜を聞き、聞いてから……〔彼らはどれほどいるのであろうか〕」

世尊はおっしゃった。「シャーラドゥヴァティープトラよ、最後の時、最後の時期に (phyi ma'i dus phyi ma'i tshe na)、北方において (byang gi phyogs cha der) 菩薩乘に属する善男子と善女人は多いであろう。シャーラドゥヴァティープトラよ、菩薩乘に属する善男子と善女人はこの甚深なる般若波羅蜜が説かれるときに、おそれない……⁽¹⁵⁾であろう。それはなぜか。……」

3.3 『十万頌般若』のまとめと考察

このように、『十万頌般若』については現存梵本と蔵訳では、両者の内容がほぼ一致しており、正法としての般若波羅蜜の流布について『十万頌般若』は次のように述べていることがわかる。

『十万頌般若』：ネパール系梵本・蔵訳カンギル所収本

- ① この般若波羅蜜は、如来滅後、南方に流布する。南方からヴァルタニ（の地）、北方に流布するだろう。
- ② この甚深なる般若波羅蜜（＝如来の意図）は、南方に流布し北方に流布するとき、最後の時、最後の時期、最後の五百年に、仏の仕事をするであろう。
- ③ 法と律が醍醐となるときに正法（＝般若波羅蜜）が隠没することはないであろう。

このように『十万頌般若』によれば、如来滅後を出発点として般若波羅蜜（経）が南、ヴァルタニ⁽¹⁶⁾、北へと伝わり、最後の時、最後の時期、最後の五百年に（paścime kāle paścime samaye paścimāyāṃ pañcaśatyāṃ; phyi ma'i dus phyi ma'i tshe lnga brgya tha ma la）仏がなすべきことをなす（sangs rgyas kyi bya ba byed pa〔梵は kariṣyati のみ〕）ものとなる、という。

以上について、漢訳のうち、玄奘訳を参照すると次の通りである。まず梵本と藏訳に「最後の時、最後の時期、最後の五百年に」とある箇所を玄奘訳『大般若 初分』は「後時、後分、後五百歳」（T220（1）, vol.6, 539a29）と訳しており、この訳語は梵文および藏訳の語とそれぞれ対応するものであることがわかる。なお、ここでの「最後（paścima）」を含むフレーズの解釈をめくり、南アジアや東アジア仏教文化圏においてそれぞれ解釈が重ねられていくことになるが、その点については改めて検討することとしたい。

また③には「法と律が醍醐となるときに（maṇḍapṛāpte dharmavinaye; chos dang 'dul ba dar la bab pa'i tshe）、正法が隠没することはないであろう（na hi ……saddharmāntaraddhānaṃ bhavati; dam pa'i chos nub par mi 'gyur te）」とあるが、玄奘訳では「非佛所得法毘奈耶無上正法有滅沒相（仏が得た法と律はこの上ない正法であり、それが滅没することはない）」（T220（1）, vol.6, 539b4-5）と訳している。梵藏に「法と律が醍醐となるとき」という表現があるうち、「醍醐となるとき（maṇḍapṛāpte; dar la bab pa'i tshe）」については、漢訳に反映されていないものと考えられる。

以上のように、「最後の時」が具体的には何時であり、また「南、ヴァルタニ、北」が具体的には何処であるのかは、経文には明示されない。具体的な時期や地域については、經典編纂者の立場からすれば、説法者や聞法者、また注釈者（さらには結果的に翻訳者）による理解に委ねられているものと推定される。本稿では紙幅の都合上、注釈文献によるコメントを示すことができないが、般若経注釈者たちは以上の経文に対して、時期や地域を具体的に述べていることを確認することができる。例えばハリバドラ（Haribhadra: 8世紀頃）は『現観莊嚴論』と『八千頌般若』とを結び付けて解説した『現観莊嚴光明という般若波羅蜜釈』（*Abhisamayālaṅkāra-Ālokā Prajñāpāramitā-vyākhyā*）において「この場合の「北方」とはどこかといえば、チーナ（Cīna）等のことである⁽¹⁷⁾」と述べている。

4. 『二万五千頌般若』における正法

『二万五千頌般若』には、梵文写本と藏訳、対応する漢訳が現存しており、梵文写本にはネパール系の完本がある。藏訳にはカンギユル所収本とテンギユル所収本とがある。これらのうち、ネパール系梵文写本と藏訳テンギユル所収本は、『現観莊嚴論』に基づき、同論の科文が挿入されたものである⁽¹⁸⁾。本稿で扱う範囲は同論による八つの現観（アビサマヤ）の中の第四現観にあたり、その中でも特に加行の十四種の功德の六番目の項目「〔般若経を教示するための〕場

所を判別すること」にあたるものである。⁽¹⁹⁾

4.1 ネパール系梵文校訂本の記述

世尊は言った。「そのとおりである。シャーリプトラよ、そのとおりである。……

またシャーリプトラよ、この般若波羅蜜は、如来の滅により南方に流布するであろう (tathāgata-satyayena dakṣiṇāpathe pracariṣyati)。……

シャーリプトラよ、この甚深なる般若波羅蜜は、南方からヴァルタニに流布するであろう (dakṣiṇāpathād vartanyāṃ pracariṣyati)。……

さらにまたシャーリプトラよ、この甚深なる般若波羅蜜は、ヴァルタニから北方に流布するであろう (vartanyā uttarāpathe pracariṣyati)。……

そこでシャーリプトラよ、この甚深なる般若波羅蜜は、仏の仕事をするであろう。それは何故か。何となればシャーリプトラよ、法と律が醍醐となるときに正法が隠没することはないであろう (na hi …… maṇḍaprāpte dharmavinaye saddharmāntaraddhānaṃ bhaviṣyati)。シャーリプトラよ、彼らは如来によって護念される。……」

シャーリプトラは言った。「また世尊よ、この甚深なる般若波羅蜜は最後の時、最後の時期に (paścime kāle paścime samaye)、北方に広まるであろう (vaistārikī … uttarasyāṃ diśi bhaviṣyati)」。]

世尊は言った。「そのとおりである。シャーリプトラよ、そのとおりである。シャーリプトラよ、この甚深なる般若波羅蜜は、最後の時、最後の時期に (paścime kāle paścime samaye)、北方に広まるであろう (uttarasyāṃ diśi vaistārikī bhaviṣyati)。そこでシャーリプトラよ、最後の時、最後の時期に (paścime kāle paścime samaye)、その善男子と善女人はこの甚深なる般若波羅蜜を聞くであろう。また聞いてから……」

シャーリプトラは言った。「世尊よ、最後の時、最後の時期に (paścime kāle paścime samaye)、北方において (uttare digbhāge)、この甚深なる般若波羅蜜を聞いてから…… [そのような] 善男子あるいは善女人はどれほどいるのであろうか」

世尊は言った。「また、シャーリプトラよ、最後の時、最後の時期に (paścime kāle paścime samaye)、北方において (uttare digbhāge)、多くの菩薩摩訶薩がいるであろう。……」。

以上、場所を判別することの功德。⁽²⁰⁾

4.2 蔵訳カンギュル所収本の記述

世尊はおっしゃった。「シャーラドゥヴァティープトラよ、そのとおりである。そのとおりで

あり、……

シャーラドゥヴァティープトラよ、この般若波羅蜜は、如来が滅してから南方に流布するであらう (de bzhin gshegs pa mya ngan las 'das nas / lho phyogs kyi rgyud na spyod par 'gyur te)。……

シャーラドゥヴァティープトラよ、そのようにこの甚深なる般若波羅蜜は、南方からヴァルタニの地に流布するであらう (lho phyogs kyi rgyud nas / yul bar ta ni na spyod par 'gyur te)。……

シャーラドゥヴァティープトラよ、そのようにこの甚深なる般若波羅蜜は、ヴァルタニの地から北方に流布するであらう (yul bar ta ni nas byang phyogs kyi rgyud na spyod par 'gyur te)。……

またシャーラドゥヴァティープトラよ、この甚深なる般若波羅蜜は、南方に流布し北方に流布するとき (lho phyogs kyi rgyud dang / byang phyogs kyi rgyud na)、最後の時、最後の時期、最後の五百年に (phyi ma'i dus phyi ma'i tshe lnga brgya tha ma la)、仏の仕事をするであらう。それは何故か。シャーラドゥヴァティープトラよ、このような如来の意図 (dgongs pa) は何であるかと言うとそれは、般若波羅蜜である。般若波羅蜜とは何であるかと言えば、それは如来の意図である。シャーラドゥヴァティープトラよ、法と律が醍醐となるときに正法が隠没することはないであらう (chos 'dul ba dar la bab pa bstan pa'i tshe dam pa'i chos nub par mi 'gyur te)。またその法とは何であるかと言えば、すなわち、この般若波羅蜜である。

〔シャーラドゥヴァティープトラは〕言った。「世尊よ、この甚深なる般若波羅蜜は最後の時、最後の時期に (slad ma'i dus slad ma'i tshe na)、北方に広まるであらう (byang phyogs su rgyas par 'gyur ro) 〕

世尊はおっしゃった。「シャーラドゥヴァティープトラよ、そのとおりである。そのとおりであり、シャーラドゥヴァティープトラよ、この甚深なる般若波羅蜜は、最後の時、最後の時期に (phyi ma'i dus phyi ma'i tshe na)、北方に広まるであらう (byang phyogs su rgyas par 'gyur te)。そこでシャーラドゥヴァティープトラよ、最後の時、最後の時期に (phyi ma'i dus phyi ma'i tshe na)、善男子と善女人らは、この甚深なる般若波羅蜜を聞くであらう。……

〔シャーラドゥヴァティープトラは〕言った。「世尊よ、最後の時、最後の時期に (slad ma'i dus slad ma'i tshe na)、北方において (byang gi phyogs cha der)、菩薩乘に属する善男子と善女人は、この甚深なる般若波羅蜜を聞き、聞いてから……〔彼らはどれほどいるのであろうか〕

世尊はおっしゃった。「シャーラドゥヴァティープトラよ、最後の時、最後の時期に (phyi ma'i dus phyi ma'i tshe na)、北方において (byang gi phyogs cha der) 菩薩乘に属する善男子と善女人は多いであらう。シャーラドゥヴァティープトラよ、菩薩乘に属する善男子と善女人はこの甚深なる般若波羅蜜が説かれるときに、おそれない……であらう。それはなぜか。……⁽²¹⁾〕

4.3 蔵訳テンギユル所収本の記述

世尊はおっしゃった。「シャーリプトラよ、そのとおりである。そのとおりであって、……
シャーリプトラよ、この般若波羅蜜は、如来が滅してから南方に流布するであろう (de bzhin
gshegs pa mya ngan las 'das nas lho phyogs kyi rgyud du dar bar 'gyur te)。……

シャーリプトラよ、またそれからこの甚深なる般若波羅蜜は、南方からヴァルタニに流布するであろう (lho phyogs kyi rgyud nas bar ta nir dar bar gyur to)。……

シャーリプトラよ、またそれからこの甚深なる般若波羅蜜は、ヴァルタニから北方に流布するであろう (bar ta ni nas byang phyogs kyi rgyud du dar bar 'gyur te)。……

そのようにシャーリプトラよ、この甚深なる般若波羅蜜は、仏の仕事をするであろう。それは何故か。シャーリプトラよ、法と律が醍醐となるとときに正法が隠没することはないであろうからである (chos dang 'dul ba dar la bab pa'i tshe dam pa'i chos nub par mi 'gyur ba'i phyr ro)。シャーリプトラよ、善男子、善女人は……」

シャーリプトラは言った。「世尊よ。この甚深なる般若波羅蜜は、最後の時、最後の時期に (slad ma'i dus slad ma'i tshe na)、北方に広まるのでしよう (byang phyogs su rgyas par 'gyur ba lags so)」

世尊はおっしゃった「シャーリプトラよ、そのとおりである。そのとおりであり、シャーリプトラよ。この甚深なる般若波羅蜜は、最後の時、最後の時期に (phyi ma'i dus phyi ma'i tshe na)、北方に広まるであろう (byang phyogs su rgyas par 'gyur te)。そこでシャーリプトラよ、最後の時、最後の時期に (phyi ma'i dus phyi ma'i tshe na)、善男子あるいは善女人らは、この甚深なる般若波羅蜜を聞くことになるでしょう。聞いてから……」

シャーリプトラは言った。「世尊よ、最後の時、最後の時期に (slad ma'i dus slad ma'i tshe na)、北方において (byang phyogs kyi cha der)、善男子あるいは善女人は、この甚深なる般若波羅蜜を聞いてから尋ねるであろう…… [そのような彼らはどれほどいるのであろうか]」

世尊はおっしゃった。「シャーリプトラよ、最後の時、最後の時期に (phyi ma'i dus phyi ma'i tshe na)、北方において (byang gi phyogs kyi cha der)、菩薩摩訶薩は多くいるであろうが……」

以上は、場所を判別することの功德 (yul spyad pa'i yon tan) である。⁽²²⁾

4.4 『二万五千頌般若』の記述のまとめと考察

このように、『二万五千頌般若』については、現存ネパール系梵本と蔵訳テンギユル所収本とがほぼ一致していること、またそれらと蔵訳カンギユル所収本とでは、若干の相違がみられる

ことがわかる。先述の通り、ネパール系梵本と蔵訳テンギェル所収本は、『現觀莊嚴論』からの影響により経文の改変、および同論の科文の挿入がなされた後のテキストであり、一方の蔵訳カンギェル所収本はその影響を受けていないテキストである。つまり、以下に分けて示す通り、旧・新『二万五千頌般若』間において、経文の相違を確認することができる。

旧『二万五千頌般若』：蔵訳カンギェル所収本

- ①この般若波羅蜜は、如来滅後、南方に流布する。南方からヴァルタニの地、北方に流布するだろう。
- ②この甚深なる般若波羅蜜（=如来の意図）は、南方に流布し北方に流布するとき、最後の時、最後の時期、最後の五百年に、仏の仕事をするであろう。
- ③法と律が醍醐となるとときに正法（=般若波羅蜜）が隠没することはないであろう。

新『二万五千頌般若』：ネパール系梵本・蔵訳テンギェル所収本

- ①この般若波羅蜜は、如来滅後、南方に流布する。南方からヴァルタニ（の地）、北方に流布するだろう。
- ②この甚深なる般若波羅蜜は、仏の仕事をするであろう。
- ③法と律が醍醐となるとときに正法が隠没することはないであろう。

以上のように、旧・新『二万五千頌般若』を比較すると、①に相違はないが、②は旧本にのみ「最後の時、最後の時期、最後の五百年に」の文言がみられる他、旧本にのみ「この甚深なる般若波羅蜜」を「如来の意図」と明示する点をあげることができる。③についても旧本にのみ「正法」を「般若波羅蜜」とする説明がみられる。

このように、旧・新『二万五千頌般若』間において、経文に若干の異同がみられる。以上について、先述した『十万頌般若』の経文と対比すると、それは旧『二万五千頌般若』と一致していることがわかる。つまり、上記該当箇所については『十万頌般若』=旧『二万五千頌般若』ということになる。

以上のうち、旧『二万五千頌般若』の②にみられた「最後の時、最後の時期、最後の五百年に」について、玄奘訳『大般若 第二分』は「後時後分後五百歳」（T220（2）, vol.7, 213c26）との訳語を与えており、この点は先の『十万頌般若』と同様である。また、旧・新『二万五千頌般若』に共通してみられた「法と律が醍醐となるとときに、正法が隠没することはないであろう」の箇所について、玄奘訳では「非佛所得法毘奈耶無上正法有滅没相（仏が得た法と律はこの上ない正法であり、それが滅没することはない）」（T220（2）, vol.7, 214a2-3）と訳し、梵蔵に「法と律が醍醐となるととき」という表現があるうち、「醍醐となるととき（maṇḍapṛāpte; dar la

bab pa'i tshé)』については、漢訳に反映されていないものと考えられる点も、先の『十万頌般若』と同様である。

以上のことから、「最後の時、最後の時期、最後の五百年に」の経文に関する限り、『二万五千頌般若』の旧本から新本の間には削除がなされたか、あるいは新本はもともと以上のフレーズを欠く系統のテキストであったものと推定することもできるが、現状において詳細は不明である。

5. 『一万八千頌般若』における正法

『一万八千頌般若』には、蔵訳と漢訳テキストが現存している。かつてエドワード・コンゼ (Conze, Edward: 1904-1979) が『一万八千頌般若』として般若経の梵文テキスト（一部）を出版しているが、厳密にはそこで用いられた写本に「一万八千頌」と明記されているわけではない。⁽²³⁾従って、「一万八千頌」と明記されたサンスクリット写本は、現状においてはその存在を確認することができないことになる。なお、コンゼによりその内容が『一万八千頌般若』と比定された梵文テキストにはここで扱う当該箇所が含まれていない。ここでは現存している蔵訳のみを示す。

5.1 蔵訳カンギュル所収本の記述

世尊はおっしゃった。「シャーリプトラよ、そのとおりでである。そのとおりであり、……シャーリプトラよ、この般若波羅蜜は、如来が滅してから南方に流布するであろう (de bzhin gshegs pa 'das nas lho phyogs kyi rgyud na spyod par 'gyur te)。……

シャーリプトラよ、この甚深なる般若波羅蜜は、南方からヴァルタニの地に流布するであろう (lho phyogs kyi rgud nas yul ba ta ni na spyod byar 'gyur te)。……

シャーリプトラよ、この甚深なる般若波羅蜜は、ヴァルタニの地から北方に流布するであろう (yul ba ta ni nas byang phyogs kyi rgyud na spyod par 'gyur te)。……

またシャーリプトラよ、この甚深なる般若波羅蜜は、未来の時、最後の五百年に (ma 'ongs pa'i dus lnga brgya tha ma la)、それらは仏のお仕事を為すであろう。それは何故か。シャーリプトラよ、法と律が醍醐となるときに正法が隠没することはないであろうからである (chos 'dul ba snying por gyur na / dam pa'i chos nub par mi 'gyur ba'i phyr ro)』

シャーリプトラは言った。「世尊よ、最後の時、最後の時期に (slad ma'i dus slad ma'i tshé na)、この甚深なる般若波羅蜜は北方に広まるものなのでありましょうか (byang phyogs su rgyas par 'gyur lags sam)』

世尊はおっしゃった。「シャーリプトラよ、そのとおりでである。そのとおりであり、シャーリ

ブトラよ、最後の時、最後の時期に (phyi ma'i dus phyi ma'i tshe na)、この甚深なる般若波羅蜜は、北方に広まるであろう (byang phyogs su rgyas par 'gyur ro)。シャーリプトラよ、最後の時、最後の時期に (phyi ma'i dus phyi ma'i tshe na)、そこで善男子と善女人らはこの甚深なる般若波羅蜜を聞いて……」

シャーリプトラは言った。「世尊よ、最後の時、最後の時期に (slad ma'i tshe slad ma'i dus na)、北方において (byang phyogs logs su)、善男子あるいは善女人なるものは、この甚深なる般若波羅蜜を聞くであろう、また聞いてから…… [彼らはどれほどいるのであろうか]」

世尊はおっしゃった。「シャーリプトラよ、最後の時、最後の時期に (phyi ma'i tshe phyi ma'i dus na)、北方において (byang phyogs logs su)、菩薩摩訶薩は多いのであるが、シャーリプトラよ、彼らはこの甚深なる般若波羅蜜を聞くであろう、また聞いてから……。それはなぜか。……」⁽²⁴⁾

5.2 『一万八千頌般若』のまとめと考察

このように、『一万八千頌般若』における説示内容は、先の『十万頌般若』と蔵訳カンギユル所収『二万五千頌般若』と近い内容をもつものであることがわかる。

『一万八千頌般若』：蔵訳カンギユル所収本

- ①この般若波羅蜜は、如来滅後、南方に流布する。南方からヴァルタニの地、北方に流布するだろう。
- ②この甚深なる般若波羅蜜は、未来の時、最後の五百年に、仏の仕事をするであろう。
- ③法と律が醍醐となるとときに正法が隠没することはないであろう。

この經典にみられる特徴的な箇所として、『十万頌般若』や旧『二万五千頌般若』において、「最後の時、最後の時期、最後の五百年に (paścime kāle paścime samaye paścimāyāṃ pañcaśatyāṃ; phyi ma'i dus phyi ma'i tshe lnga brgya tha ma la)」としていたところを、この『一万八千頌般若』のみが「未来の時、最後の五百年に (ma 'ongs pa'i dus lnga brgya tha ma la)」とする点をあげることができる（還梵すると、*anāgate kāle paścimāyāṃ pañcaśatyāṃ となるであろうか）。

以上の②「未来の時、最後の五百年に」という箇所について玄奘訳『大般若 第三分』を参照すると「後時後分後五百歳」(T220(3), vol.7, 594b25) となっている。玄奘は先の『大般若初分』から『同 第三分』まで全くの同文である。また③の「法と律が醍醐となるとときに」という箇所は、玄奘訳では「非佛所得法毘奈耶無上正法有滅沒相」(T220(3), vol.7, 594c1) となっ

ており、この点も、『十万頌般若』、『二万五千頌般若』の例と同様である。

6. その他の Larger *Prajñāpāramitā* における正法

ギルギットや中央アジア、スリランカから『二万五千頌般若』等の大部の般若経やその断片が出土している。それらは「十万頌」や「二万五千頌」等の明記がないことから、一括して Larger *Prajñāpāramitā* として理解されている。それらの写本に即するならば、それらは単に「般若経」ということになり、つまりこのことから、経文に大小の異同がみられる大部の般若経が数種現存していることになる。またそれらはその写本類が発見された地域ではすでに仏教（あるいは大乘仏教）の伝統が失われてしまっており、その点ですべて「出土写本」⁽²⁵⁾となるものである。それらのうち、まとまった形で発見された写本として、ギルギット出土写本の他、敦煌出土写本、スリランカ出土の黄金プレートに刻まれたものがあり、さらに断片的なものとして中央アジア出土写本が現存している。⁽²⁶⁾

以上の写本類の中で、敦煌出土写本については、Suzuki & Nagashima [2015] による研究があるが、同写本には該当箇所付近が欠けている。スリランカのアヌラダプラにあるジェータヴァナ・ヴィハーラ址から出土した黄金プレートにシンハラ文字で刻まれた般若経については Hinüber [1984] による研究がなされているが、これもまた該当箇所付近が現存していない。管見の限り、本稿で扱う箇所が現存しているのは、ギルギット写本のみ⁽²⁷⁾のようである。

6.1 ギルギット出土梵文写本の記述

世尊 [は言った。]「そのとおりである、シャーラドゥヴァティープトラよ、そのとおりである。…… (LPG156v3-4)

またシャーラドゥヴァティープトラよ、この般若波羅蜜は、如来の滅により南方に流布するであろう。…… (LPG157r2)

シャーラドゥヴァティープトラよ、この甚深なる般若波羅蜜は、南方からヴァルタニに流布するであろう。…… (LPG157r5-6)

そしてまたシャーラドゥヴァティープトラよ、この甚深なる般若波羅蜜は、ヴァルタニから北方に流布するであろう。…… (LPG157r9)

そこでシャーラドゥヴァティープトラよ、この甚深なる般若波羅蜜は、私の仕事をなすであろう。それは何故か。シャーラドゥヴァティープトラよ、法と律が醍醐となるときに正法が隠没することはないであろう。…… (LPG157r12)

[シャーラドゥヴァティープトラは] 言った。「また世尊よ、この甚深なる般若波羅蜜は、最後の時、最後の時期に、北方に広まるであろう」(LPG157v7-8)

世尊は言った。「そのとおりである。シャーラドゥヴァティープトラよ、そのとおりである。シャーラドゥヴァティープトラよ、この甚深なる般若波羅蜜は、最後の時、最後の時期に、北方に広まるであろう。(LPG157v8-9)

そこでシャーラドゥヴァティープトラよ、最後の時、最後の時期に、あるもの、善男子と善女人は、この甚深なる般若波羅蜜を聞き、また聞いてから……」(LPG157v9)

〔シャーラドゥヴァティープトラは〕言った。「最後の時、最後の時期に、北方に、この甚深なる般若波羅蜜を（聞いてから……）……〔そのような〕菩薩乘に属する善男子と善女人は、どれほどいるのであろうか」(LPG157v12)

世尊は言った。「またシャーラドゥヴァティープトラよ、最後の時、最後の時期に、北方に多くの菩薩摩訶薩があるであろう……」(LPG158r1-2)

6.2 その他の Larger *Prajñāpāramitā* のまとめと考察

このように、該当箇所に関する限り、ギルギット写本の内容は新『二万五千頌般若』とほぼ一致したものであることがわかる。

ギルギット出土写本

- ① この般若波羅蜜は、如来滅後、南方に流布する。南方からヴァルタニ、北方に流布するだろう。
- ② この甚深なる般若波羅蜜は、仏の仕事を為すであろう。
- ③ 法と律が醍醐となるときに正法が隠没することはないであろう。

以上のように、当該箇所に関する限り、ギルギット写本の記述は先の新『二万五千頌般若』と一致したものであることがわかる。ここでは両テキスト形成の先後関係については考察を進めず、ひとまず以上の点のみ指摘することとする。

7. むすびにかえて

本稿にて提示した諸般若経の記述内容に基づき、簡素なものから詳細なものへとパターン化（A～C）してまとめると表4のとおりとなる。諸本間における異同箇所には下線を付して示す。

本稿で扱った経文の記述を表4のように並べることができる。ただし、これを単純にパターン（A）から（C）へと經典が直線的に展開したものと理解するべきではないであろう。すでに指摘した通り、般若経の編纂者は必要に応じて経文を付加、削除、あるいは改変してきたことがわかっている。⁽²⁸⁾このことが他のいわゆる「大乘經典」全般においても言えることであるか

表4 諸般若経における正法隠没に関する記述一覧

①	②	③	パターン
この般若波羅蜜は、如来滅後、南方に流布する。南方からヴァルタニ(の地)、北方に流布するだろう。	この甚深なる般若波羅蜜は、仏の仕事をするであろう。	法と律が醍醐となるとときに正法が隠没することはないであろう。	(A) ギルギット出土写本(梵) = 新『二万五千頌』(梵・蔵)
	この甚深なる般若波羅蜜は、 <u>未来の時、最後の五百年に、</u> 仏の仕事をするであろう。		(B) 『一万八千頌』(蔵)
	この甚深なる般若波羅蜜(=如来の意図)は、 <u>南方に流布し北方に流布するとき、最後の時、最後の時期、最後の五百年に、</u> 仏の仕事をするであろう。	法と律が醍醐となるとときに正法(=般若波羅蜜)が隠没することはないであろう。	(C) 旧『二万五千頌』(蔵) = 『十万頌』(梵・蔵)

どうかは現時点では不明であるが、少なくとも般若経はそのように変容しながら、幾種類もの般若経を生み出してきたと考えることができる。⁽²⁹⁾

さて、ここで扱った諸般若経のうち、最も説示の分量が多いパターン(C)の旧『二万五千頌般若』と『十万頌般若』は、「正法」(saddharma)の内実を「般若波羅蜜〔経〕」(prajñāpāramitā)であると明確に述べ、さらにそれは「如来の意図」(tathāgatasyānumati)であると説明している。般若経編纂者は「般若波羅蜜〔経〕こそが、正法である」ということを、パターン(C)においてのみ、明示したようである。また、すべてのパターンに共通して示される「法と律」(dharma-vinaya)や「正法」という語は、この般若経と伝統的仏教との連続性を強調する点にねらいがあるものと考えられる。⁽³⁰⁾

なお、本論でも触れたことであるが、本稿で扱った仏滅後における般若波羅蜜(経)が流布する時期や地域について、經典編纂者は「最後の時」や「北方」と記すのみである。それが具体的に何時なのか、何処なのかといった説明は、この經典を仏説として受容する者(あるいはさせようとする者)や、注釈者たちによってなされていったものと考えられる。

最後に、本稿では「2. 研究の範囲」において『八千頌般若』における正法の説示箇所を例として示したが、その経文と本稿で扱った『十万頌般若』等の経文には相違がみられることを確認した。本稿で扱わなかった Smaller *Prajñāpāramitā* 等との比較や、注釈者たちによる理解内容については稿を改めて論じることとしたい。

略号と文献

D：デルゲ版カンギユル／テンギユル

Buddhist Digital Resource Center (BDRC) にて公開されているスキャンデータを使用 (<https://www.tbrc.org/#footer/about/newhome>)。

M：モンゴル国立図書館所蔵ウランバートル写本カンギユル

Digital Preservation Society (DPS) によるスキャンデータ使用。

T：大正新脩大蔵経

大正新脩大蔵経テキストデータベース (SAT) にて公開されているテキストデータおよびスキャンデータを使用 (21dzk.l.u-tokyo.ac.jp/SAT/index_en.html)。

一次文献

梵文

『十万頌般若』 *Śatasāhasrikāprajñāpāramitā* : 校訂本未完. 東大写本 No.382と No.384 (ともに東京大学総合図書館所蔵河口慧海将来写本) を使用 (南アジア・サンスクリット語写本データベース : utlskts.ioc.u-tokyo.ac.jp/description.html).

『二万五千頌般若』 *Pañcaviṃśatisāhasrikāprajñāpāramitā* : Kimura [1990] を使用.

『八千頌般若』 *Aṣṭasāharikāprajñāpāramitā* : Wogihara [1932-35] を使用.

ハリバドラ (Haribhadra) 『現觀莊嚴光明という般若波羅蜜釈』 *Abhisamayālamkāra-Ālokā Prajñāpāramitā-vyākhyā* : Wogihara [1932-35] を使用.

蔵訳

カンギユル所収

『十万頌般若』 : **Śatasāhasrikāprajñāpāramitā*; *Shes rab kyi pha rol tu phyin pa stong phrag brgya pa*, tr. by - (D no.8; M no.9; P no. 730).

『二万五千頌般若』 : **Pañcaviṃśatisāhasrikāprajñāpāramitā*; *Shes rab kyi pha rol tu phyin pa stong phrag nyi shu lnga pa*, tr. by - (D no.9; M no.10; P no. 731).

『一万八千頌般若』 : **Ārya-Aṣṭādaśasāhasrikāprajñāpāramitā-nāma-mahāyānasūtra*; *'Phags pa shes rab kyi pha rol tu phyin pa khri brgyad stong pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo*, tr. by Jinamitra, Surendrabodhi, Ye shes sde (D no.10 M no.11; P no. 732).

テンギユル所収

『二万五千頌般若』 : **Pañcaviṃśatisāhasrikāprajñāpāramitā* ; *Shes rab kyi pha rol tu phyin pa*

stong phrag nyi shu lnga pa, tr. by Zhi ba bzang po, Tshul khri ms rgyal ba (D no.3789; P no.5188).

漢訳

- 『大般若 初分』：玄奘訳『大般若波羅蜜多經：初分』（T.no. 220 (1), vol.5～6).
 『大般若 第二分』：玄奘訳『大般若波羅蜜多經：第二分』（T.no. 220 (1), vol.7).
 『大般若 第三分』：玄奘訳『大般若波羅蜜多經：第三分』（T.no. 220 (1), vol.7).

二次文献

- 江島恵敬 [2003] 『空と中観』 東京：春秋社
 梶山雄一 [1974] 『八千頌般若経 I：大乘仏典 2』 東京：中央公論社.
 小峰彌彦&勝崎裕彦&渡辺章悟編 [2015] 『般若経大全』 東京：春秋社.
 佐々木教悟 [1987] 「正法隠没思想管見」『インド仏教：インド東南アジア仏教研究Ⅲ』 京都：平楽寺書店, pp.274-307.
 庄司史生 [2015] 「現存梵本『八千頌般若』はいかに形成されたか」『中央学術研究所紀要』 44, pp.57-78.
 ____ [2016a] 『ロンドン写本カンギェル所収チベット語訳『八千頌般若』の研究』（Bibliotheca Tibetica et Buddhica, vol.1） 東京：山喜房佛書林.
 ____ [2016b] 『八千頌般若経の形成史的研究』（立正大学大学院文学研究科研究叢書） 東京：山喜房佛書林.
 ____ [2017] 「チベット語訳『八千頌般若』の改訳過程とその背景—近代日本の入蔵者らによる将来本を手がかりとして—」『法華文化研究』 43, pp.1-23.
 ____ [2019] 「八千頌般若と二万五千頌般若へ」『日蓮教学とその展開：庵谷行亭先生古稀記念論文集』 東京：山喜房佛書林, pp.1041-1051.
 ____ & 佐々木一憲 [2019] 「ネパール仏教の特色：般若経写本を手がかりとして」『鎌倉・ネパール研究紀要』 東京：立正大学研究推進・地域連携センター, pp.99-106.
 谷口富士夫 [2002] 『現観体験の研究』 東京：山喜房佛書林.
 林純教 [2000] 『藏文和訳一万頌般若経』 東京：大東出版社.
 平川彰 [1989] 「(二) 大乘経典に見られる後五百歳の意味」『初期大乘仏教の研究 I：平川彰著作集第3巻』 東京：春秋社, pp.157-166.
 藤田祥道 [2010] 「大乘仏説論から見た仏説の意味」『日本仏教学会年報』 76, pp.1-26.
 本庄良文 [2011] 「アビダルマ仏教と大乘仏教」『大乘仏教の誕生：シリーズ大乘仏教 2』 東京：

春秋社, pp.173-204.

丸山孝雄 [1975] 「末法と後五百歳」『印度学仏教学研究』24 (1), pp.97-102.

____ [1976] 「中国における末法思想」『法華経信仰の諸形態：法華経研究6』京都：平楽寺書店, pp. 377-425.

渡辺章悟 [2001a] 「インド仏教の法滅思想（1）：『金剛般若』の法滅句をめぐる」『東洋学研究』37, pp.336-313.

____ [2001b] 「インド仏教の法滅思想（2）：初期仏教資料をめぐる」『東洋学論叢』26, pp. (115) - (130).

____ [2009] 『金剛般若経の研究』東京：山喜房佛書林.

____ [2011] 「大乘仏典における法滅と授記の役割一般般若経を中心として」『大乘仏教の誕生：シリーズ大乘仏教2』東京：春秋社, pp.73-108.

Hinüber, Oskar von [1984] *Sieben Goldblätter einer Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā aus Anurādhapura*, Nachrichten der Akademie der Wissenschaften in Göttingen 1, Philologisch-historische Klasse, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.

Karashima, Seishi & Lee, Youngjin & Nagashima, Jundo & Shoji, Fumio & Suzuki, Kenta & Ye Shaoyong & Zacchetti, Stefano [2016] *Gilgit Manuscripts in the National Archives of India* vol. II.1. *Mahāyāna Texts: Prajñāpāramitā Texts* (1), Tokyo: The National Archives of India and The International Research Institute for Advanced Buddhology.

Kimura, Takayasu [1990] *Pañcaviṃśatisāhasrikā prajñāpāramitā IV*, Tokyo: Sankibo Press.

Nattier, Jan [1991] *Once upon a future time: studies in a Buddhist prophecy of decline, Nanzan studies in Asian religions*, vol.1, Berkeley, California: Asian Humanities Press.

Suzuki, Kenta & Nagashima, Jundo [2015] “The Dunhuang Manuscript of the Larger Prajñāpāramitā”, *The British library Sanskrit fragments: Buddhist manuscripts from Central Asia* III.2, The International Research Institute for Advanced Buddhology, pp.594-821.

Torricelli, F. & Dudka, N.N. [1999] ‘Manuscript LTWA No.23476: “sDe can” Sample of the brGyad stong pa.’ *The Tibet Journal (summer)*, 24 (2) pp.29-43.

Wogihara, Unrai [ed.] [1932-35] *Abhisamayālmkārālokā Prajñāpāramitāvyākhyā*, Tokyo: Tōyō Bunko.

注

- (1) ここにいう「正法隠没」説とは、いわゆる「正法隠没思想」（佐々木 [1987]）に関する説示を指す。『金剛般若経』と『八千頌般若』における例については渡辺 [2011] によって詳しく論じられている。また、法滅思想に関する先行研究の主なものとして Nattier [1991]、渡辺 [2001a]、同 [2001b] がある。般若経以

外の經典、例えば『法華經』における「正法隱沒」説については、丸山 [1975]、同 [1976] 等に詳しい。

- (2) このように、本稿では般若經における正法に関して、特に梵文および藏訳『十万頌般若』『二万五千頌般若』『一万八千頌般若』を扱い、ここで扱いきれない『一万頌般若』と『八千頌般若』については、別稿にて扱い、そこで総合的に考察を行うこととしたい。

なお、以上は南アジア、内陸アジア仏教文化圏における般若經の受容と展開というテーマの中で特に「正法」に関する説示をキーワードとして取り上げるものということになる。つまり、本稿を含む以上の研究テーマは、主として「經典編纂者」の立場という点に着目するものとなる（ここでの「經典編纂者」とは、般若經の原形成立の後、多様に展開したであろう諸般若經を、現存の形態へとまとめていったものたちのことを指すものとする）。これに対して、「注釈者」の立場による理解（つまり論師たち、この場合特に南アジアの論師たちが、般若經における正法の説示をどのように解釈していたか）については、改めて論じる必要がある。さらにその他の視点として、東アジア仏教文化圏において、般若經における正法の説示をどう理解してきたか、についても論じる必要があると思われる。その場合は漢訳者や東アジアの論師たちの解釈を主として扱うことになる。また内陸アジアの論師たちの理解についても検討する必要がある。

以上のように、本研究は般若經における正法の説示について、南アジア、内陸アジア、東アジアといった地域を対象とし、そこに經典編纂者、注釈者、翻訳者らによる理解という視点を加え、仏教者らがどのように正法を理解してきたかを明らかにすることを目指すものである。以上の見通しを表にして示すと以下の通りである。本稿は①ということになる。

表5 般若經における「正法」説示の諸相に関する今後の研究の見通し

対象とする仏教文化圏	視点	主として扱う經典	課題番号
南アジア (補助的に内陸アジア・東アジア文献も扱う)	編纂者 (補助的に藏訳者)	十万頌、二万五千頌、一万八千頌	①
		一万頌、八千頌	②
	注釈者	十万頌～八千頌	③
内陸アジア	注釈者	十万頌～八千頌	④
東アジア	漢訳者	十万頌～八千頌	⑤
	注釈者	十万頌～八千頌	⑥
上記を踏まえた、般若經における正法理解の思想史的研究			⑦

- (3) 庄司 [2016] を参照。それ以前の研究成果については同書にまとめて記している。この、いわゆる『現觀莊嚴論』と般若經の經文とを実際に結び付けて論じた注釈文献のうち、現存最古のものは、アーリヤ・ヴィムクティセーナ (Ārya-Vimuktisena: 6世紀頃) による『現觀莊嚴注』 (*Abhisamayālamkāra-vṛtti*) である。本稿で扱うテキストはみな、年代的にこれ以降のものと考えられるという点で、本研究の範囲は後期インド仏教に限定されたものともいえる。
- (4) このことは、これら般若經典に関する限り、經典編纂者と經典注釈者との境界線が不鮮明であることを意味するものと理解することもできる。編纂者と注釈者という両者の関係をどのようにとらえるべきであるか、検討が必要となるであろう。特に『八千頌般若』の改変については、庄司 [2016] を参照。
- (5) 經と論がインド仏教思想史上においてどのような関係にあったかについては、江島 [2003: 145-178] に詳しく論じられている。
- (6) 一般的に般若經は紀元前後頃に原形が成立していたと理解されるが、その後も手が増えられ、近代に入っ

てからは、例えばネパールでは1960年刊行のいわゆる「Vaidya 本」を用いて梵文写本に手が加えられている様子が知られている。庄司&佐々木 [2019] を参照。

- (7) 平川 [1989: 157-166] を参照。
- (8) ime khalu punaḥ śāriputra ṣaṭpāramitā-pratisaṃyuktāḥ sūtrāntās tathāgatasyātyayena dakṣiṇāpathe pracariṣyanti dakṣiṇāpathāt punar eva vartanyāṃ pracariṣyanti vartanyāḥ punar uttarāpathe pracariṣyanti navamaṇḍapṛāpte dharmavinaye saddharmasyāntardhāna-kāla-samaye (Wogihara [1932-35: 487, 7-18])
- (9) 般若経の形成については、庄司 [2015] にてすでに論じ、庄司 [2016b] にてそれを一部修正している。また、諸般若経の形成過程において、厳密にいうならば『八千頌般若』から『二万五千頌般若』が生み出されたのではなく、両者の共通のルーツ（現存しない『四千頌般若』か）から両者がそれぞれ発展していったのである、ということについては、庄司 [2019] にて言及した。
- (10) 般若経諸本の対照表は、例えば Conze [1978: 42-45] 小峰ほか [2015: 195-211] を参照。
- (11) 玄奘訳『大般若波羅蜜多経』と蔵訳カンギユル般若部との対応については、慶吉祥らによる『至元法宝勘同総録』（1287年～）においてなされている。
- (12) 蔵訳『八千頌般若』に三種ありとの指摘は、すでに Torricelli & Dudka [1999] によってなされ、その新たな資料を追加した研究に庄司 [2016a]、同 [2016b]、同 [2017] がある。
- (13) Conze [1978: 31-34]、小峰ほか [2015: 69]、また庄司 [2016b: 32-33] を参照。
- (14) 以下、本稿では梵文や蔵訳の原文を示す際、葉数行数は（ ）、異読等については | | で示す。また原文引用中の下線類は筆者によるものである。

bhaga(400a3)vān āha // evam etac chāradvatīputraivam etat / ... (No.382 [3] , 340a10; No.384 [3] , 400a2-3)

iyam punaḥ|punaḥ: 382 puna| śāradvatīputra prajñāpāramitā tathāgatasyātyayena|tathāgatasyātyayena: 382 tathāgatasyātyayena; 384 tathāgatasyātyayena| dakṣiṇāpathe pra(341a9)cariṣyati //382 om. //| ... (No.382 [3] , 341a8-9; No.384 [3] , 400b12)

seyaṃ śāradvatīputra gambhīrā|gambhīrā: 384, gambhīrā| prajñāpāramitā dakṣiṇāpathād varttanyāṃ pracariṣyati ... (No.382 [3] , 341b1; No.384 [3] , 401a3)

sā|384, sā| kha(341b5)lu punar iyam śāradvatīputra gambhīrā prajñāpāramitā varttanyā uttarāpathe pracariṣyati ... (No.382 [3] , 341b4-5; No.384 [3] , 401a7)

tatra śāradvatīputra dakṣiṇāpathe (341b9) uttarāpathe ceyaṃ gambhīrā prajñāpāramitā paścime kāle paścime samaye paścimāyāṃ|paścimāyāḥ: 382; 384 paścimāyā| pañcaśatyāṃ|pañcaśatyāḥ: 384 pañcaśatyāḥ (?) | kariṣyati // tat kasya hetoḥ / tathā (401a12) hi śāradvatīputra tayā tathāgatasyānumatiḥ sā prajñāpāramitā sā tathāgata(341b10)syānumatiḥ / na hi śāradvatīputra maṇḍapṛāpte dharmavinaye sad-dharmāntarddhānam bhavati / katamaś ca sa (401a13) ddharmā yaduteyaṃ prajñāpāramitā / ... (No.382 [3] , 341b8-10; No.384 [3] , 401a11-13)

āha // vaistārakī|vaistārakī: 384 vaistārakī| punar bhagavan paścime (342b8) kāle paścime samaye iyam gambhī(402a8)rā prajñāpāramitā uttarasyāṃ diśi bhaviṣyanti|bhaviṣyanti: 384 bhaviṣyati| //

bhagavān āha // evam etac chāradvatīputraivam etat /|/: 384 //| iyam śāradvatīputra gambhīrā prajñāpāramitā paścime kāle paścime samaye vaistārakī|vaistārakī: 382 vaistārakī| bha(342b9)viṣyaty uttarasyāṃ (402a9) diśi|diśi: 384 diśa| tatra śāradvatīputra paścime kāle paścime samaye te|384 om. te| kulaputrāḥ kuladuhitaraś ca imāṃ gambhīrāṃ prajñāpāramitāṃ |384 ins. //| śroṣyanti śrutvā ... (No.382 [3] , 342b7-10; No.384 [3] , 402a7-9)

āha // kiyantā bhagavan bodhisatvayānikāḥ kulaputrāḥ kuladuhitaraś ca paścime kāle paścime samaye uttare digbhāge (402a13) bhaviṣyanti {384 ins. /} ya imāḥ gambhīrāḥ prajñāpāramitāḥ śroṣyanti śrutvā ... (No.382 [3] , 343a1; No.384 [3] , 402a12-13)

bhagavān āha // kiṃ cāpi śāradvatiputra paścime kāle paścime samaye uttare digbhāge bahavo bodhisatvā mahāsattvā bhaviṣyanti // {382 om. /} ... (No.382 [3] , 342a2; No.384 [3] , 402b1)

- (15) bcom ldan (M301a6) 'das kyiṣ bka' stsal pa / sha ra dwa|dwa: M dwā ti'i bu de de bzhin no // de de bzhin te / ... (D [Ta] 55b3; M [Da] 301a5-6)

sha ra dwa|dwa: M dwā ti'i bu shes rab kyi pha rol tu phyin pa 'di de bzhin gshegs pa 'das nas / lho phyogs kyi rgyud na spyod par 'gyur te / ... (D [Ta] 57a4; M [Da] 303a2)

sha ra dwa|dwa: M dwā (M303b1) ti'i bu de ltar shes rab kyi pha rol tu phyin pa zab mo 'di lho phyogs kyi rgyud nas yul bar ta|bar ta: M bar rta ni na spyod par 'gyur te / ... (D [Ta] 57b2; M [Da] 303a8-b1)

sha ra dwa|dwa: M dwā ti'i bu de ltar shes rab kyi pha rol tu phyin pa zab mo 'di yul bar ta|bar ta: M bar rta ni nas byang phyogs kyi rgyud (D58a1) na spyod par 'gyur te / ... (D [Ta] 57b7-58a1; M [Da] 303b8)

sha ra dwa|dwa: M dwā ti'i (D58a6) bu de ltar shes rab kyi (M304a8) pha rol tu phyin pa zab mo 'di lho phyogs kyi rgyud dang / byang phyogs kyi rgyud na phyi ma'i dus phyi ma'i tshe {D ins. /} lga brgya tha ma la sangs rgyas kyi bya ba byed par 'gyur ro // de ci'i phyir zhe na / (M304b1) sha ra dwa|dwa: M dwā ti'i bu de ni 'di ltar de bzhin (D58a7) gshegs pa'i dgongs pa gang yin pa de ni {D ins. /} shes rab kyi pha rol tu phyin pa'o // shes rab kyi pha rol tu phyin pa gang yin pa de ni {D ins. /} de bzhin gshegs pa'i (M304b2) dgongs pa'o // sha ra dwa|dwa: M dwā ti'i bu chos dang 'dul ba dar la bab pa'i tshe / dam pa'i chos (D58b1) nub par mi 'gyur te / chos de yang gang zhe na {D ins. /} 'di lta ste / shes rab kyi pha rol tu phyin (M304b3) pa 'di'o // ... (D [Ta] 58a5-b1; M [Da] 304a7-b3)

gsol pa / bcom ldan (M307a4) 'das shes rab kyi (D60b1) pha rol tu phyin pa zab mo 'di slad ma'i dus slad ma'i tshe na {D ins. /} byang phyogs su rgyas par 'gyur ro // (D [Ta] 60a7-b1; M [Da] 307a3-4)

bcom ldan 'das kyiṣ bka' stsal pa / sha ra dwa|dwa: M dwā ti'i bu (M307a5) de de bzhin no // de de bzhin te / sha ra dwa|dwa: M dwā ti'i bu shes rab kyi pha rol tu phyin pa zab mo (D60b2) 'di phyi ma'i dus phyi ma'i tshe na {M om. na} {D ins. /} byang phyogs su rgyas par 'gyur te / de la / {M om. /} sha ra dwa|dwa: M dwā ti'i bu (M307a6) phyi ma'i dus phyi ma'i tshe na / rigs kyi bu dang {M ins. /} rigs kyi bu mo de dag ni {M om. ni} shes rab kyi pha rol tu phyin pa zab mo 'di nyan par 'gyur te / thos nas ... (D60b1-2; M [Da] 307a4-6)

gsol pa / bcom ldan 'das slad ma'i dus slad ma'i tshe na / byang gi phyogs cha der byang chub sems dpa'i theg (M307b4) pa pa'i rigs kyi bu dang {M ins. /} rigs kyi bu mo gang shes rab kyi pha rol tu phyin pa (D60b7) zab mo 'di nyan cing {D ins. /} thos nas ... (D [Ta] 60b6-7; M [Da] 307b3-4)

bcom ldan 'das kyiṣ bka' stsal pa / sha ra dwa|dwa: M dwā ti'i bu phyi ma'i dus phyi ma'i tshe na / {M om. /} byang gi phyogs cha der byang chub sems (M307b7) dpa'i theg pa pa'i rigs kyi bu dang {M ins. /} rigs kyi bu mo ni (D61a2) mang du 'byung ste / sha ra dwa|dwa: M dwā ti'i bu byang chub sems dpa'i theg pa pa'i rigs kyi bu dang {dang: M 'am} rigs kyi bu mo shes rab kyi (M307b8) pha rol tu phyin pa zab mo 'di bstan pa'i tshe / mi {mi: D myi} 'jum ... (D61a3) ... de ci'i phyir zhe na / ... (D [Ta] 61a1-3; M [Da] 307b6-8)

- (16) ヴァルタニについて、渡辺章悟博士によって「……東とはサンスクリット文 AS, PV とともに vartani であり、チベット語訳では3本ともに bartani, wartani と音訳する……」(引用中の AS は『八千頌般若』、PV と

は『二万五千頌般若』のことと説明されている（渡辺 [2009: 20]）。

(17) *kiṃ tarhy uttare dig-bhāge* Cina-deśa'ādaṃ (Wogihara [1932-35: 488.17-18])

(18) Conze [1978: 34-40]、小峰ほか [2015: 69-70]、また庄司 [2016b: 33-36] を参照。

(19) この箇所について谷口博士は、第四現觀の十二偈 ab（諸魔の力を打ち負かすなど、功德は十四種類である）にあたり、十四種とは「1）魔の力を打ち負かすこと、2）仏に顧慮され面識を持たれること、3）仏に現に見守られていること、4）正等覺に近付いたこと、5）甚大な利益、6）〔般若經を教示するための〕場所を判別すること、7）漏出のないあらゆる徳が完成すること、8）布教者であること、9）打ち碎かれないこと、10）独特の善根が生ずること、11）誓願を如実に実現すること、12）広大な果を取得すること、13）衆生の利益を行ずること、14）確実に〔般若波羅蜜を〕得ること」であることを指摘している（谷口 [2002: 251]）。

(20) *bhagavān āha: evam etac chāriputra evam etat ...* (Kimura [1990: 27.16])

... *iyam ca śāriputra prajñāpāramitā tathāgatasyātyayena dakṣiṇāpathe pracariṣyati* (Kimura [1990: 28.20-21])

... *seyam śāriputra gambhīrā prajñāpāramitā dakṣiṇāpathād vartanyam pracariṣyati*…… (Kimura [1990: 28.29-30])

... *sā khalu punar iyam śāriputra gambhīrā prajñāpāramitā vartanyā uttarāpathe pracariṣyati*…… (Kimura [1990: 29.8-9])

... *tatra śāriputra iyam gambhīrā prajñāpāramitā buddhakṛtyam kariṣyati tat kasya hetor? na hi śāriputra maṇḍapaprāpte dharmavinaye saddharmāntarddhānam bhaviṣyati, samanvāhṛtās te śāriputra mayā ...* (Kimura [1990: 29.17-20])

śāriputra āha: *vaistārikī punar iyam bhagavan gambhīrā prajñāpāramitā paścime kāle paścime samaye uttarasyam diśi bhaviṣyati.* (Kimura [1990: 30.7-8])

bhagavān āha: evam etac chāriputra evam etat, iyam śāriputra gambhīrā prajñāpāramitā paścime kāle paścime samaye uttarasyam diśi vaistārikī bhaviṣyati, tatra śāriputra paścime kāle paścime samaye te kulaputrāḥ kuladuhitaraś ca ya imāṃ gambhīrāṃ prajñāpāramitāṃ śroṣyanti śrutvā ca ... (Kimura [1990: 30.9ff.])

śāriputra āha: *kiyantā te bhagavan kulaputrā vā kuladuhitaro vā bhaviṣyanti?, ya imāṃ gambhīrāṃ prajñāpāramitāṃ paścime kāle paścime samaye uttare digbhāge śrutvā ...* (Kimura [1990: 30.20-24])

bhagavān āha: kiṃ cāpi śāriputra paścime kāle paścime samaye uttare digbhāge bahavo bodhisattvā mahāsattvā bhaviṣyanti ...

iti deśanirūpaṇāguṇaḥ (Kimura [1990: 30.25-30])

(21) *bcom ldan 'das kyis (D243b3) bka' sstal pa / sha ra dwa tīi bu de de bzhin no // / : D / / de de bzhin te / ...* (D [Kha] 243b2-3; M [Ga] 75b5)

sha ra dwa|dwa: M dwā| tīi bu (M76b8) shes rab kyi pha rol tu|tu: D du| phyin pa 'di de bzhin gshegs pa mya ngan las 'das nas / lho (D244b2) phyogs kyi rgyud na spyod par 'gyur te / ... (D [Kha] 244b1-2; M [Ga] 76b7-8)

sha ra dwa|dwa: M dwā| tīi bu |M ins. / (M77a7) de ltar shes rab kyi pha rol tu|tu: D du| phyin pa zab mo 'di lho phyogs kyi rgyud nas / yul ba rta|ba rta: M bar ta| ni na spyod par 'gyur te / ... (D [Kha] 244b6; M [Ga] 77a6-7)

sha ra dwa tīi bu / de (M77b6) ltar shes rab kyi pha rol tu|tu: D du| phyin pa zab mo 'di yul (D245a4) ba rta|ba rta: M bar ta| ni nas |M ins. / byang phyogs kyi rgyud na spyod par 'gyur te / ... (D245a3-4; M

[Ga] 77b5-6)

sha ra dwa|dwa: M *dwā*| ti'i bu de ltar shes rab kyi (M78a5) pha rol tu|tu: D *du*| phyin pa zab mo 'di lho phyogs kyi rgyud dang / byang phyogs kyi rgyud na / phyi ma'i dus phyi ma'i tshe |D ins. /| Inga brgya tha ma la |D ins. /| (D245b2) sangs rgyas kyi bya ba byed par 'gyur ro // de ci'i phyir zhe na / (M78a6) sha ra dwa|dwa: M *dwā*| ti'i bu de ni 'di ltar /|D om. /| de bzhin gshegs pa'i dgongs pa gang yin pa de ni shes rab kyi pha rol tu|tu: D *du*| phyin pa'o // shes rab kyi pha rol tu|tu: D *du*| phyin pa gang yin pa de ni|ni: D *na*| /|D om. /| de bzhin gshegs (M78a7) pa'i dgongs pa'o // sha ra dwa|dwa: M *dwā*| (D245b3) ti'i bu /|D om. /| chos 'dul ba dar la bab pa bstan pa'i|bab pa bstan pa'i: D bab pa'i tshe |D ins. /| dam pa'i chos nub par mi 'gyur te / chos de yang gang zhe na /|D om. /| 'di lta ste / shes rab kyi pha rol tu|tu: D *du*| phyin (M78a8) pa 'di'o // sha ra dwa|dwa: M *dwā*| ti'i bu /|D om. /| rigs kyi bu 'am /|D om. /| rigs kyi bu mo ... (D [Kha] 245b1-3; M [Ga] 78a4-8) ...

gsol pa / bcom ldan 'das shes rab kyi pha rol tu|tu: D *du*| phyin pa (M79a4) zab mo 'di slad ma'i dus slad ma'i tshe na / byang phyogs su rgyas par 'gyur ro // (D [Kha] 246a4; M [Ga] 79a3-4)

bcom ldan 'das kiyis bka' stsal pa / sha ra dwa|dwa: M *dwā*| ti'i bu de de bzhin no //|D om. //| (D246a5) de de bzhin te / (M79a5) sha ra dwa|dwa: M *dwā*| ti'i bu /|D om. /| shes rab kyi pha rol tu|tu: D *du*| phyin pa zab mo 'di phyi ma'i dus phyi ma'i tshe na / byang phyogs su rgyas par 'gyur te / de la sha ra dwa|dwa: M *dwā*| ti'i bu phyi ma'i dus phyi ma'i tshe na /|D om. /| (M79a6) rigs kyi bu dang |M ins. /| rigs kyi bu mo de dag shes rab kyi pha rol tu|tu: D *du*| phyin pa zab mo 'di nyan par 'gyur te / ... (D [Kha] 246a4-5; M [Ga] 79a4-6)

gsol pa / bcom ldan 'das (M79b3) slad ma'i dus slad ma'i tshe na / byang gi phyogs (D246b2) cha der byang chub sems dpa'i theg pa pa'i rigs kyi bu dang |M ins. /| rigs kyi bu mo gang |M ins. /| shes rab kyi pha rol tu|tu: D *du*| phyin pa zab mo 'di nyan cing |M ins. /| (M79b4) thos nas ... (D [Kha] 246b1-2; M [Ga] 79b2-4)

bcom ldan 'das kiyis bka' stsal pa / sha ra dwa|dwa: M *dwā*| ti'i bu /|D om. /| phyi ma'i dus phyi ma'i tshe na / (M79b6) byang gi phyogs cha der byang chub sems dpa'i theg pa pa'i rigs kyi bu dang |M ins. /| rigs kyi bu (D246b4) mo ni mang du 'byung ste / sha ra dwa|dwa: M *dwā*| ti'i bu byang chub sems dpa'i theg pa pa'i rigs kyi bu dang |M ins. /| (M79b7) rigs kyi bu mo shes rab kyi pha rol tu|tu: D *du*| phyin pa zab mo 'di bstan pa'i tshe / mi 'jum / ... de ci'i (D246b5) phyir zhe (M79b8) na / ... (D [Kha] 246b3-5; M [Ga] 79b5-8)

(22) bcom ldan 'das kiyis bka' stsal pa / shā ri'i bu de de bzhin no // de de bzhin te / ... (D [Nga] 191a7)

shā ri'i bu shes rab kyi pha rol tu phyin pa 'di de bzhin gshegs pa mya ngan las 'das nas lho phyogs kyi rgyud du dar bar 'gyur te / (D [Nga] 192a6)

shā ri'i bu de nas yang shes rab kyi pha rol tu phyin pa zab mo 'di lho phyogs kyi rgyud nas bar ta nir dar bar gyur to // (D [Nga] 192b2)

shā ri'i bu de nas yang shes rab kyi pha (D192b6) rol tu phyin pa zab mo 'di bar ta ni nas byang phyogs kyi rgyud du dar bar 'gyur te / (D [Nga] 192b5-6)

shā ri'i bu de ltar shes rab kyi pha rol tu phyin pa zab mo 'dis sangs (D193a2) rgyas kyi bya ba byed par 'gyur ro // de ci'i phyir zhe na / shā ri'i bu chos dang 'dul ba dar la bab pa'i tshe dam pa'i chos nub par mi 'gyur ba'i phyir ro // shā ri'i bu rigs kyi bu 'am / rigs kyi bu mo ... (D [Nga] 192a6-193a2)

shā ri'i bus gsol pa / bcom ldan 'das shes rab kyi pha rol tu phyin pa zab mo 'di slad ma'i dus slad ma'i tshe na / byang phyogs su rgyas par 'gyur ba lags so // (D [Nga] 193b2)

bcom ldan 'das k'yis bka' stsal pa / shā ri'i bu de de bzhin no // de debzhin te / shā ri'i bu shes (D193b3) rab kyi pha rol tu phyin pa zab mo 'di phyi ma'i dus phyi ma'i tshe na byang phyogs su rgyas par 'gyur te / der shā ri'i bu phyi ma'i dus phyi ma'i tshe na / rigs kyi bu 'am rigs kyi bu mo de dag shes rab kyi pha rol tu phyin pa zab mo 'di nyan par 'gyur te / thos nas …… (D [Nga] 193b2-3)

shā ri'i bus gsol pa / bcom ldan 'das slad ma'i dus slad ma'i tshe na byang phyogs kyi cha der rigs kyi bu 'am / rigs kyi bu mo gang (D [Nga] 193b7) shes rab kyi pha rol tu phyin pa zab mo 'di thos nas 'dri bar 'gyur / … (D [Nga] 193b6-7)

bcom ldan (D194a1) 'das k'yis bka' stsal pa / shā ri'i bu phyi ma'i dus phyi ma'i tshe na byang gi phyogs kyi cha der byang chub sems dpa' sems dpa' chen po mang du 'byung mod kyi / … zhes bya ba ni yul dpyad pa'i yon tan (D194a3) no // (D [Nga] 193b7-194a3)

(23) Conze [1978: 40-41]、小峰ほか [2015: 71]、また庄司 [2016b: 36-37] を参照。

(24) bcom ldan 'das (M196a5) k'yis bka' stsal pa / shā ri'i (D107b5) bu /M om. / de de bzhin no // de de bzhin te / … (D [Kha] 107b4-5; M [Kha] 196a4-5) …

shā ri'i bu shes rab kyi pha rol tu phyin pa 'di ni de bzhin (M197a6) gshegs pa 'das nas |D ins. /| lho phyogs kyi rgyud na spyod par 'gyur te / … (D [Kha] 108b1; M [Kha] 197a5-6)

shā ri'i bu shes rab kyi pha rol tu phyin pa zab mo 'di lho phyogs kyi rgyud nas |D ins. /| yul ba ta|ba ta: M barta| ni na spyod par (M197b3) 'gyur te / … (D [Kha] 108b4; M [Kha] 197b2-3)

shā ri'i bu shes rab kyi pha rol tu phyin pa zab mo 'di yul ba ta|ba ta: M barta| ni nas |D ins. /| byang phyogs kyi rgyud na spyod par 'gyur te / … (D [Kha] 109a1; M [Kha] 97b8)

shā ri'i bu de ltar na shes rab kyi pha rol tu phyin pa zab mo 'di ni ma (M198a5) 'ongs pa'i dus lnga brgya tha ma la de dag ni sangs rgyas kyi mdzad pa byed par 'gyur ro // de ci'i phyir zhe na / shā ri'i bu chos 'dul ba snying por gyur na / dam pa'i chos nub (M198a6) par mi 'gyur (D109a5) ba'i phyir ro // … (D [Kha] 109a4-5; M [Kha] 198a4-6)

shā ri'i bus gsol pa / bcom (D109b5) ldan 'das slad ma'i dus slad ma'i tshe na / shes rab kyi pha rol tu phyin pa zab mo 'di byang phyogs (M198b1) su rgyas par 'gyur lags sam / (D [Kha] 109b4-5; M [Ga] 198a8-b1)

bcom ldan 'das k'yis bka' stsal pa / shā ri'i bu de de|de de: M dai| bzhin no // de de bzhin te / shā ri'i bu phyi ma'i dus phyi ma'i tshe na / (M198b2) shes rab kyi (D109b6) pha rol tu phyin pa zab mo 'di byang phyogs su rgyas par 'gyur ro // shā ri'i bu phyi ma'i dus phyi ma'i tshe na |M ins. /| de na|M om. de na| rigs kyi bu dang /|D om. /| rigs kyi bu mo de|de: M gang| dag shes rab kyi pha rol tu (M198b3) phyin pa zab mo 'di nyan par 'gyur zhing / thos nas kyang … (D [Kha] 109b5-6; M [Ga] 198b1-3)

shā ri'i bus gsol pa / bcom ldan 'das slad ma'i tshe slad (M198b7) ma'i dus na / byang phyogs logs su rigs kyi bu 'am / rigs kyi bu mo gang dag|M om. dag| shes rab kyi pha rol tu phyin pa zab mo 'di nyan par 'gyur zhing /|D om. /| thos nas kyang … (D110a2; M [Ga] 198b6-7)

bcom ldan 'das k'yis bka' stsal pa / shā ri'i bu phyi ma'i tshe phyi ma'i dus na / (D110a3) byang phyogs logs su byang chub sems dpa' sems dpa' chen po ni mang du 'byung mod kyi /|D om. /| shā ri'i bu gang dag shes (M199b2) rab kyi pha rol tu phyin pa zab mo 'di nyan par 'gyur ba dang / thos nas kyang … (D110a2-3; M [Ga] 199b1-2)

(25) 「出土写本」と「伝世写本」の語については、松田和信 [2014: 6-8] を参照。

(26) 小峰ほか [2015: 409-424] 所収、加納和雄 [「1」写本と挿絵入装飾経] を参照。

(27) ギルギット写本については、Karashima ほか [2016] により、写真版が刊行されている。ここでは和訳

のみを記すこととしたい。

(28) 般若経の改変については、庄司 [2016b] にて論じた。

(29) 中央アジアから断片的に発見されている Larger *prajñāpāramitā* を見る限り、おそらくは写本の数だけ般若経の数があることになるのではないかとも思われる。中央アジアにおける Larger *prajñāpāramitā* 断片に関する研究が既に多くなされている（庄司 [2016a: 33] を参照）。

(30) ここで扱う「正法」理解にかかわる問題は「仏説論」というキーワードの枠内において考えられるべきものといえるのかもしれない。仏説論の展開については、例えば本庄 [2011] や、藤田 [2010] 等がすでに詳細に論じている。

〈キーワード〉般若経, 正法, 仏説論

* 本研究は JSPS 科研費18K12202（インド仏教におけるもうひとつの般若経解釈史）による研究の一部である。

Summary

Various Aspects of the Preaching Saddharma in the Larger Prajñāpāramitā Sūtras —Focusing on Descriptions of *Saddharmasyāntardhāna* or the Concealing Saddharma—

Fumio SHŌJI

How have Buddhists been careful to keep *dharma* (Buddhist teachings) preached by the Buddha from disappearing? After the death of the Buddha, some of them seemed to have compiled the Prajñāpāramitā Sūtras in order to preserve *saddharma*, namely, the right teaching. And it is known that there are descriptions of the concealing *saddharma* in the Prajñāpāramitā Sūtras. Those who compiled these scriptures had mentioned the way to keep *saddharma* from disappearing according to their own understanding.

Modern researchers have already studied in detail on the matter on *saddharmasyāntardhāna* meaning 'the concealing the right teaching' and *saddharma-vipraloṣa* meaning 'the disappearing of the right teaching' which are referred to in the *Aṣṭasāhasrikā-prajñāpāramitā* (Eight thousand [verses] of Perfection of Wisdom) and in the *Vajracchedikā-prajñāpāramitā* (Diamond Cutter of Perfection of Wisdom).

In this paper, I investigated on this matter referring to passages in the so-called Larger Prajñāpāramitā Sūtra such as the *Śatasāhasrikā-prajñāpāramitā* (One hundred thousand [verses] of Perfection of Wisdom), the *Pañcaviṃśatisāhasrikā-prajñāpāramitā* (Twenty-five thousand [verses] of Perfection of Wisdom) and the *Aṣṭādaśasāhasrikā-prajñāpāramitā* (Eighteen thousand [verses] of Perfection of Wisdom) which researchers have not referred to on this topic before. Using mainly existing Sanskrit texts of these sutras and subsidiarily Tibetan translations of these sutras, I examined sample passages and gave the problem some consideration.

Through carrying out this investigation, I intended to clarify one of various aspects of the preaching *saddharma* (the right teaching) mentioned in the Prajñāpāramitā Sūtras

spread over Buddhist cultural spheres in South Asia using Sanskrit and similar languages and in Inland Asia using Tibetan language. With regard to passages in the *Daśasāhasrikā-prajñāpāramitā* (Ten thousand [verses] of Perfection of Wisdom), the *Aṣṭasāhasrikā-prajñāpāramitā* (Eight thousand [verses] of Perfection of Wisdom) and other similar sutras, I will discuss this matter in another article.